

平成紙



おりおりの記

紀元二千六百年—その一

公益財団法人 資本市場研究会
顧問

長岡 實

西暦1940年、昭和15年の11月10日に「紀元二千六百年記念式典」が行われたと歴史年表に載っている。2014年の今日、このことを知っているひとは少いであろう。「紀元二千六百年だって。何だい、それは」ということだろうが、当時は国をあげて、真面目に二千六百年を祝ったのである。

司馬遼太郎に『明治という国家』と『昭和という国家』という表題の著作がある。「昭和」というのは昭和20年までを指す。

まず、「明治」からはじめよう。司馬はこの著作の第一章で次のように書いている。

「……明治は、リアリズムの時代でした。……そこへゆくと、昭和には——昭和二十年までですが——リアリズムがなかったのです。左右のイデオロギーが充満して国家や社会をふりまわしていた時代でした。どうみても明治とは、別個の観があり、べつの民族だったのではないかと思われるほどです。」

そして司馬は明治時代とはせずに、ことさら「明治国家」としている。では「昭和」（20年まで）についてはどう書いているか。「昭和という国家」の第一章「何が魔法をかけたのか」で、司馬は次

のように書いている。

「日本という国の森に、大正末年、昭和元年ぐらいから敗戦まで、魔法使いが杖をポンとたたいたのではないのでしょうか。その森全体を魔法の森にしてしまった。発想された政策、戦略、あるいは国内の締めつけ、これらは全部変な、いびつなものでした。」

そしてこの魔法の森から日華事変も、太平洋戦争も現れた。いわゆる「司馬史観」のひとつまである。

司馬遼太郎は昭和18年に学徒出陣という形で、本人の意思とは無関係に陸軍へ、その翌年私は同じ形で海軍へ。陸軍海軍の別を問わず、軍人になるということは、国に命を捧げるということで、われわれ世代の青年には「未来」というものは考えられなかった。

昭和11（1936）年ベルリンでオリンピックが開かれ、4年後の昭和15（1940）年には東京で開催の予定だったが、第二次世界大戦で実現しなかった。世田谷の駒沢公園付近にわずかにその準備のあとをとどめている。東京オリンピックの実現は昭和39（1964）年となった。